

しても有効であることを物語っている。とくに種属交叉性抗体は同一の抗体がマウスのみならずヒト黒色腫と同等に反応するので、動物実験系とヒトとの間に横たわる虚無的な空間を一挙に越えることが出来た点でも意義がある。

66-1. 消化器疾患に対する超音波穿刺術の治療への応用

渡辺 義二 (千大)

消化器疾患特に肝胆膵疾患を中心に超音波画像診断に加えて、超音波ガイドに目標部位を穿刺する超音波穿刺術を(1)吸引細胞診(2)胆管および胆嚢造影(3)肝嚢胞、膵嚢胞に対する嚢胞造影(4)門脈造影(5)胆管、胆嚢、肝膿瘍、横隔膜下膿瘍に対するドレナージ(6)腫瘍内制癌剤注入(7)手術施行のガイド等に施行し、診断及び治療に良好な成績を得ているので報告した。

66-2. レーザー内視鏡の最近の進歩

神津 照雄 (千大)

現在までに8例の肝内結石症に対し、YAG レーザー利用の内視鏡的截石を施行し良好な成績を得ている。レーザー利用の利点は従来の截石法に比し容易に大きな結石でも小破片にすることができ、PTCD 拡張瘻孔からも完全截石が可能となる点である。この他食道の悪性黒色腫再発例に対して Hematoporphilin Derivative と Argon-Dye レーザーの光化学反応を利用した治療例を報告した。

66-3. 消化器の移植

浅野 武秀 (千大)

1) 異所性肝移植 イヌにおける実験で障害自己肝機能の補助を、T. Bil, Hepaplastin 値で証明した。2) 同所性肝移植、下大静脈遮断のない千大二外変法を示した。3) 肝組織片移植の方法と成績を示した。4) 膵部分移植で Cyclosporin A の有用性を示した。5) 食道バイパスとして、血管吻合を伴う小腸ブリッジ移植を提唱し、生存犬を得、本術式の臨床応用の可能性について述べた。

66-4. 急性疾患に対する各種血液浄化法の応用

平澤 博之 (千大)

我々は、活性炭を用いた direct hemoperfusion, centrifuge 式の plasmapheresis, hemodialysis, peritoneal

dialysis, hemofiltration 等を、急性肝不全、急性薬物中毒及び急性腎不全に応用し効果をあげている。これらの血液浄化法には、各々その能力に特長があるので、それらを良く理解した上で、各病態に適切な浄化法を選択する事が肝要である。

66-5. 外科栄養の現況

小越 章平 (千大)

教室では、一般消化器外科手術前後の管理に、経中心静脈高カロリー輸液を昭和48年よりとり入れたが、現在ますます本法で管理する症例が増える傾向にある。一方新しい栄養管理法として、我々は昭和53年に新しいタイプの成分栄養剤を開発したが、これは56年9月に保険薬として認可され、広く一般に利用されるようになった。これは、とくに食道癌の合併療法との併用や、Colon preparation として、新しい適応で好成績を取めている。

66-6. 短胃動静脈を生かした胃管形成術について

磯野 可一 (千大)

胸壁前食道胃吻合術について、縫合不全を minor, と major leak とに分けた。minor leak は技術的な面に負う所が多く、器械吻合を応用し改善をみている。major leak は胃管の血流障害によることが主で、短胃動静脈を利用した胃管を作製し、犬動物実験並びに臨床例で検討した。縫合不全に対し、両者の併用は優れた方法と思う。

66-7. 器械 (EEA) による各種食道吻合について

—とくに嚥下圧と胸壁前食道胃吻合—

平嶋 毅 (千大)

米国製消化管自動縫合器 EEA を用いて各種の食道吻合34例を行なったがいずれも縫合不全が認められなかった。今回はとくに EEA を用いた胸壁前食道胃吻合6例について空嚥下時の食道内圧変化をみたがいずれも吻合部近傍において正常に近い変化を認めた。これは EEA 吻合が狭窄を作らない吻合法であることを証するものである。食道癌2期手術の人工食道内圧測定を6例について行なったが、人工食道開放時は閉鎖時よりも嚥下圧は低く、閉鎖によって極めて高い陽性波とこれが持続したが、この事より嚥下圧が極めて吻合に影響すると思われる。吻合を拡張力の強い EEA で行えば縫合不全を防止できる。